

第26回新人シナリオコンクール応募作品

プラタナスにつながれた犬

西村遼

登場人物表

- 司（29） 居酒屋の客引き
- ユカ（16） 家出少女。セックスワーカー
- 愛（25） 司の彼女
- 宗介（28） 司の同僚
- ミヤ（26） 司の同僚
- 勇太（20） 新人客引き
- 香山（28） 司の同僚。遅番
- 店長（32） 司の働く居酒屋の店長
- 希子（22） キッコ。カラオケ店客引き
- 高安（37） 風俗店客引き
- 泉（29） 司の青森の同級生
- 油谷（20） ユカの常連。ガテン系
- 山田（37） ユカの常連客

あらずじ

司は高校生の頃、癌で闘病中の父親にわざと母親の不倫を教えた。父親は現実には打ちのめされ、自殺する。司はそれを教訓に現実から目を逸らし、罪悪感からも逃げていた。

三十歳を間近に控えた司は、バンドの夢を諦め、潜在的な不安を抱えながら居酒屋の客引きでその日暮らしの日々を送っていた。

司が働く商店街では再開発の計画が持ち上がっており、司が嫌いな八百屋の反対により辛うじて商店街が維持されていた。しかし火事で八百屋が亡くなると、父親の死の想起、罪悪感、死のショック、今後の生活への不安等から司は慢性的既視感を発症する。日々の生活で既視感を感じ、反復動作のセックスでは既視感のループから抜け出せなくなる恐怖を味わい、セックスができなくなる。

一方で同級生の影響を受け、家出少女のユカを家に泊める代わりに、セックスワークで稼いだ金の一部を徴収していた。ユカと暮らし、慢性的既視感が収まったが、ユカにアプローチを受けても性交渉はすべて断っていた。再開発により失職すると、同級生に蔑視されたことも

あつて、客引き以外の仕事を探すが就職できずにいた。貯金も失業保険もない不安が徐々に司を蝕む。

ユカを好きだったが、現状をユカのせいにして、本当はしてほしくない売春をさせる。ユカも今の生活を壊したくないために司に従う。

現実逃避からの根拠のない自信は、就活の不調から脆くも崩れ、不安と閉塞感から慢性的既視感が再発する。

結局、また客引きとして働くことを決意し、閉塞感を脱したかに見えたが、ユカの客が嫌いな元同僚と知ってユカと喧嘩別れになる。元同僚から司がセックスできない理由を聞いたユカは最後にセックスをするよう司に促す。司はセックスで不安から解放され、既視感を感じた情景を、「必ず通らなければならぬ運命の道」だと捉えて現状を受け入れるようになる。

ただしユカを別の男に取られることが父親と重なり、それだけは受け入れられずにいた。ユカを「好きじゃない」と言い張り、買春として金を払う。ユカを絶望からリストカット直前まで追い込むが、ユカとの思い出に触れてようやくすべてを受け入れられるようになる。

電車・内（夕）

男Aがドアに凭れて外を眺めている。

窓外に司の働く商店街が見えてくる。

電車が駅に着き、男Aがホームに降りる。

チラリと腕時計に目を遣る。

駅・改札付近（夕）

男Aが改札を出て、通勤客で混雑した中から手を挙げている男Bを見つける。

男A「よう、久しぶり。遅れて悪かったね」

男B「駅の周りをぐるっとしてた。初めて降りたけど、

向こうが栄えてたね」

男A「ああ、電車からも見えたよ」

歩き出す二人。

男B「関東も梅雨明けしたらいいね」

男A「あれ、俺もここは初めてかと思ったけど、この景

色は見たことがあるな」

商店街・入口

栄通商店街と書かれた古いアーチ。

政治家が街頭演説をしている横で、メイド喫茶のメイドがチラシを配っている。

サンドイッチマンが立っている。

電柱には客引きを禁じる色褪せた張り紙。

男A、Bが商店街の中に入っていく。

狭い道幅の両脇に店が連なる古い商店街。

勇太（20）、希子（25）、ミヤ（26）が次々と声を掛けてくる。

勇太「居酒屋どうツスカ。千円飲みホで」

希子「カラオケは？ 中で飲めますよ」

ミヤ「居酒屋ご利用ありませんかー、今ならすぐご案内できますよ」

キャッチを躲して歩く男A、B。

男A「どついう店が良いかな」

司の声「そつツスねー」

後ろから二人の間に割り込む司（29）。

私服に居酒屋の前掛けをしてメニューを腰に挟んでいる。

司「ここら辺は学生も多いツスからねー。さつき声をかけてきたような店はちよつと」

無視して少し足を速める男A、B。

司は男Aの横に並んでついていく。

司 「うるさい店と静かな店だとどっちが良いですか？」

男A 「さあ……静かな店かな」

司 「やっぱそうツスよねー。ファーストドリンクは無

料と有料なら？」

男A 「……」

司 「偶然なんすけどお、本当偶然スよ？ 僕、そうい

う店を知ってんスよ。ある所にはあるもんスねー」

男A 「でも、もう結構歩いて来ちゃったし」

司 「一度歩いた道は戻りたくない系スかね」

男A 「そうね、戻りたくない系だね」

司 「分かります、それ。振り返るなんてダサいツスよ

ね」

男A 「そう、だから……」

司 「（遮り）丁度良かった。このビルの五階がうちの

店なんで、さ、どうぞどうぞ」

先に立ってエレベーターの方に歩く司。

男A、Bは苦笑し、エレベーターを開けて待つ

司の元に歩いていく。

タイトル

『プラタナスにつながれた犬』

商店街・路上（夕）

電柱に凭れてアイスを食べている司。

勇太「おはよざーす」

勇太の仕事始めの挨拶に、軽く頷く司。

ドサツという物音がして、目を向ける。

大きな荷物を持ったユカ（16）が銀行の無人A

TMコーナーの前で倒れている。

ATMから続いて警備員が出てくる。

ユカ「（警備員に）押すことないじゃん！」

ユカの立ち去る後ろ姿を、司がアイスの棒を啜
えて眺めている

× × ×

夜になり一部壊れたネオンが光っている。

大学生の団体に司が食い下がっている。

男C「僕ら、もう明日が早いんで」

司「そんなおっさんみたいな」

男C「まじ勘弁ス」

司「今帰ったら今日は終わっちゃうんスよ？終電まで飲めばまだ今日は続くのに」

男D「そうだよ、終電までまだあんだろ」

男C「じゃあお前らだけで行ってこいよ」

司「いやいやいや、一、二、三……六人揃っての友達じゃないスか。それとも一人だけ友達じゃないとか？」

男E「(男Cに)おい、てめえ！」

男C「分かった分かった！一時間だけな！」

司が素早く携帯で店に電話をかけ、

司「もしもし？六名なんですけど……」

電話をしながら客をエレベーターに誘う。

エレベーターに乗り、客に、

司「混んできたなら二時間制になりますんで」

男C「そんなにいないんで大丈夫です」

男D「どれくらいの確率ですか？」

司「さあ……二時間経ってみないと分かんないスね」

男C「ボーアだ」

男D「神はサイコロを振らないんじゃないの」

エレベーターが五階につき、開く。

司 「（扉を押さえ）神様も博打くらい打ちたいんじゃないスか」

笑いながらエレベーターを降りる客を店長

（32）が出迎える。

店長「いらつしゃいませー」

客を送り出し、一階のボタンを押す司。

司の居酒屋・表（夜）

エレベーターから下りて煙草を啜える司。

路駐バイクのミラーで髪をチェックしていると、

鏡越しに睨む八百屋と目が合う。

司が啜えていた煙草をそっと箱に戻す。

商店街の外れ・喫煙所（夜）

高安（37）が煙草を吸っている。

近くでユカが地べたに座って、ぼろぼろになっ

た漫画雑誌を読んでいる。

司が入ってきて、煙草に火をつける。

司 「クソ八百屋、死ねばいいのに」

高安「本当に死んだら困るよ。再開発」

司「まだ靴屋も反対してるっしょ」

高安「靴屋はもう廃業するんだって。もし新しい商業施設ができてもし入居しないらしい」

司「えー、サンダルを履き潰したらいつもあそこで買ってたのに。靴って三千円出せば三ヶ月、五千なら五ヶ月もつんだけど、あそこは三千円で四ヶ月ももつんすよね」

高安「その頃にはもうツカっちゃんの店も潰れてるよ。だからもし八百屋の気が変わったら、この商店街は取り壊しだよ」

司「何かあの八百屋、死んだ親父を思い出させるのがムカつくんだよねあ」

高安「ツカっちゃん、お父さんいたんだ？」

司「片親っばい？」

高安「うん、俺と似た感じがしてたから」

司「いたけど、いつも死ぬって思ってたら高校の頃に本当に癌に耐え切れずに自殺しちゃって。ああ願い事って叶うんだなって……（ユカを指し）いらないの？」

高安「(首を振り) 出会い系のせいで今はお茶を引く子も多いからね。毛が生えてりゃ誰でも良いってわけじゃないんだよ」

煙草を消して喫煙所を出る二人。

高安「あれは明らかに神待ちだよ」

司「家出して何でこの街なんだろ」

高安「たまに電車で迷い込んでくる虫がいるでしょ？

あの虫がどこまで運ばれてどこで降りるかなんて…

…」

高安は会話の途中で外国人を見つけて、

高安「へい、シャルウイスケべ？」

司を置いて外国人についていく高安。

同・路上(夜)

司がメニューをくるくる指で回している。

前方から酔った若い女性二人が、甲高い笑い声を上げて近づいてくる。

司「居酒屋どうツスか、二軒目。三軒目？安くしときますよ」

後ろ向きに歩きながら女性についていく。

司 「あれ、前も声かけことないっけ？」

女A 「ないない。この道を通るの初めてだし」

司 「じゃあ俺がお勧めの店を紹介するよ」

女B 「カラオケに行くからいい」

司 「カラオケ？ 駄目駄目、法律でプロ以外は歌うのは禁止になったんだよ」

女B 「（笑い）何それ、意味分かんないから」

司 「いい店、知ってっからそっちで飲もうよ。（メニューを叩き）こういうクソみたいな店じゃなくて」

女A 「勿論奢ってくれんでしょ？」

司 「勿論勿論！ 女の子に金を出させたことなんか一度もないよ。じゃあすぐ戻るから待ってて。十秒、

十秒！」

女A、B 「一、二……」

司 「（勇太に）勇太！ 勇太！」

離れた場所にいる勇太は気づかない。

司 「（女性に）ちよつと待ってて、すぐ！」

勇太の元に駆け寄り、前掛けを投げる。

司 「勇太！ 俺、上がるから」

勇太 「え、俺に渡されても……」

司が女性達の元に戻るも、姿が見えない。
暫く探すが、諦めて煙草を啜える。

商店街の外れ・喫煙所（夜）

ユカが座って漫画雑誌を読んでいる。

司が煙草を吸いながら表紙を覗き込む。

司 「結構前の奴を読んでんね」

ユカ「（顔を上げず）一ヶ月前」

司 「何回も読んでんの？ 飽きない？」

ユカ「別に。この後どうなるか想像しながら読んでるか
ら」

司 「煙草吸うの？ ずっとここにいてるけど」

ユカ「吸わないよ。外にいと太陽に押し倒されてここに
来ただけ」

司 「……うちに最新号があるけど、答え合わせする？」

ユカ、初めて顔を上げて司の顔を見る。

コンビニ・表（夜）

司が自転車を止め、ユカと店に入る。

同・内（夜）

ユカが買い物カゴにおにぎりやお菓子などをど
んどん入れていく。

司 「おいおい、どんだけ腹が減ってんだよ……あ、俺
も何か買う物があつたな」

ユカが、携帯のロック解除コードを入力する司
の手元を見ている。

司 「ああ、洗顔が切れてんだつた」
洗顔ソープをカゴに追加してレジに並ぶ。

ユカ、入口近くの夕刊を指さし、

ユカ「首都高で炎上事故だつて。怖いねー」

司 「ん？ そうね」

夕刊の見出しを眺めているユカ。

マンション・外観（夜）

ユカの声「キャッチってそんなに儲かんのか？」

同・九階エレベーターホール（夜）

エレベーター内を映した画面に司とユカが映っ
ている。

司の声「俺くらい優秀だとね。客が使う金の二十パー近く入るから、月に五十万とか」

ユカの声「五十万!? 本当にいるんだね、金持ちって」

エレベーターが開き、二人が降りてくる。

司「全部使っちゃうから貯金はねえけど」

同・居間（夜）

ユカ「すげえ広いのな！ あ、これ知ってる。レコードでしょ？（ギターを見つけ）ギターやるの？」

司「友達の忘れ物」

同・洗面所（夜）

化粧道具が並んでいる。

ユカ「彼女いるの？」

司「元カノの忘れ物」

ユカ「皆、忘れっぱいね」

同・寝室（夜）

ユカがクイーンベッドに倒れ込むと、ベッドの

上で前転をする。

ユカ「久しぶりに布団で眠れるときは嬉しくてでんぐり返ししちゃうね！」

司「まーじでー！」

司もベッドで前転と、続けて後転もする。

司「あ、痛、首を痛めた……」

笑っているユカに司が抱きつく。

ユカ「本番はNGだから」

司「本番以外でいくら？」

ユカ「一万」

司「高っ！」

ユカ「だつて十六だし」

司「聞いてない、聞こえてない。本当は？」

ユカ「十六歳」

司「馬鹿か。じゃなくて？」

ユカ「……二十歳？」

司「よしよし。成人してるなら安心安心」

財布から札を数え、ユカに渡す。

札を数えるユカに手を差し出す。

司「宿代」

ユカ「いくら？」

司がユカに渡した金を全部取り返す。

ユカ「高っ！ スイートかよ」

司「先に風呂に入る。漫画はリビングね」

財布を持って風呂場に向かう司。

ユカ「盗らねえよ」

同・居間（夜）

浴室からシャワーの音が聞こえる。

ユカが司の携帯のロックを解除しようとパスワードを入力するが、携帯が振動してコードが間違えていることを告げる。

菓子を食べながら、近くにある紙を裏返し、間違えたコードを書いていく。

同・浴室（夜）

シャワー中の司が、残り少ない洗顔のチューブを強く握るも中身が出ない。

同・居間（夜）

ユカが司の指の動きを思い出しながらコードを入力している。

浴室へ通じるドアが開き、司が水を垂らしながら顔を出す。

とつさに携帯を脇に投げるユカ。

司 「……………洗顔取って」

近くの洗顔ソープを司に投げるユカ。

司 「サンキュ……………何やってんの？」

ユカ 「……………日記を書いていた」

司 「（ドアを閉めながら）後で読ませて」

ユカ 「嫌に決まってんじゃん」

安心してまた携帯を手取るユカ。

x x x

ウォーターサーバーのタンクの水が減り、ゴボ

ツと音を立てる。

風呂上りの司が、ウォーターサーバーの水を飲

みながら何かを探します。

ユカは新しい漫画雑誌を読んでいる。

司 「そついや電気代をそろそろ払わねえと。あ、この
コップは使わないで」

司がユカの使っているコップを下げて、別のコップに水を入れて渡す。

司「……ねえなあ。酔って捨てたかな。電気の請求書見なかった？」

首を振るユカ、ごみ箱を漁りだす司。

ユカ「さっきのコップは何で駄目なの？」

司「（ごみ箱を探しながら）んー？」

ユカがわざとコップを倒し、水をこぼす。

司「あーあー」

布巾をユカに渡し、再びごみ箱を探す司。

ユカが書いていたメモを見つけて眺める。

司「……何だ、この数字？」

ユカがメモを奪おうとするが司が避ける。

司「（携帯を開き）……ロックされてねえじゃん。お前、俺の携帯を触ったる」

ユカ「触ってない」

司「（携帯をいじり）何に使ったんだよ、気持ち悪いなあ。通話の履歴はなし……あ、出会い系の閲覧履歴があるな……チッ、ログインできねえよ。自分用に使ったの？」

ユカ「使ってない」

司「正直に言えよ。今なら許してやつから」

ユカ「何で私だって決めつけんの!? 触ってないっつ

てんじゃない!」

司「俺、アプリ入れてんだぞ。ログインを三回ミスっ

たら自動で写真を撮る奴」

ユカ「嘘だね」

司「嘘じゃねえよ」

ユカ「シャッター音しなかったし」

司「しないようになってんだよ。つーかもう認めてん

じゃねえか」

ユカ「認めてない」

司「じゃあもしお前の写真が撮られてたらどうすんだ

よ」

ユカ「写ってないし」

司「もしだよ」

ユカ「写ってない」

司「チッ、仮定の話もできねえのかよ。頭、弱えなあ

……大体自分の携帯はねえの?」

ユカ「とつくに止められてるよ」

司が携帯を操作する間にユカが素早く荷物をまとめて部屋を出て行く。

司 「ほら、やつぱ写ってんじゃねえか！」

何か盗られた物がなにか周りを見る司。

ユカが置いていった古い漫画を手に取る。

司 「あ、新しい奴！」

居間を出ていくが、暫くして戻ってくる。

ユカの漫画を溜っている漫画雑誌の上に積み重ね、外出用に着替え始める。

ふと柵の上にある請求書に気づく。

商店街・路上（夜）

ミヤや香山（28）達数人の客引きが、嫌がる勇太を押している。

騒動の中に司が入ってくる。

司 「何、何？」

ミヤ「あれ、戻ってきたの？ こいつが英語を喋れるって言っからな」

皆の勇太を押す手が止まる。

勇太の先には路上で輪になって話している欧米

人のグループがいる。

香山「キャンユースピークイングリッシュ?」

勇太「あー……（流暢に）リルビツ」

司も加わり、再び勇太を押し始める。

司「行つてこいよ、大学生!」

勇太「無理ツス、無理ツス!」

勇太が押し負かされて外国人のグループの輪に

勢いよく入っていく。

勇太「えー……居酒屋いかがツスか?」

司達が離れて勇太の様子を見ている。

早口の英語で道を聞かれている模様。

勇太「あー……ア、リルビツ」

司「ぜつてえ通じてねえよ!」

爆笑する司達。

司の居酒屋・内（深夜）

司、ミヤ、勇太が飲んでいる。

司「そろそろ移ろつぜ、こんなクソみたいな店から」

勇太「店長ー、司さんがこの店をクソだって」

店長「この店のどこがクソなんだよ。クソなのはためえ

だけだろ」

司 「いやいや、店長もクソっしょ」

ミヤ 「店長も後で合流する？」

店長 「お前らと飲むと朝まで飲むから嫌だ」

司 「明日死ぬかも知れないのに？」

店長 「余計嫌だろ。てめえと違ってこっちは家庭があるんだよ」

司 「俺は嫌だね、そんな来る前から明日が分かってるような生活は。ザ・リーマン」

店長 「責任つて言葉……」

勇太 「（遮り）まあまあお互い酔ってるってことで」

店長 「俺はしらふだよ」

司 「俺らとは生き方が違っつてことだね」
立ち上がる司達。

同・表（深夜）

司達が店から出てくると、私服姿の希子を通りかかる。

希子 「お先ツス」

司 「おい、たまには付き合えよ」

希子「彼氏が待つてるんでー」

手を挙げて帰っていく希子。

司が八百屋の前で煙草をポイ捨てる。

二十四時間居酒屋・店内（深夜）

司、ミヤ、勇太が飲んでいる所へ、遅番の香山

達客引き二、三人が合流する。

股間を搔いている香山。

司「何？性病？」

香山「いや、チン毛に白いのが混ざったから」

ミヤ「いや、意味分かんないから」

勇太「虱ツスよ、それ」

香山「白髪だよ。チン毛の白髪を染めようとしてかぶれ

た。超シヨックだよ」

勇太「勇太チエーツク！」

勇太と司が香山のズボンを引っ張って確認する。

司「……染まってねえじゃねえか！」

香山「え、嘘!? どれ？」

勇太「何本あるんすか！」

ミヤ「てか、お前、幾つだよ！」

同・表（早朝）

通勤客が駅に向かって足早に歩いている。

司がミヤたちの周りを自転車でぐるぐる回っている。

店の中から香山が出てくる。

香山「お待た」

司「じゃあまた後で」

ふらふらと自転車を漕ぎ出す司。

勇太の声「（後から）オツですー！」

マンション・寝室

司が前シーンと同じ服装で寝ている。

愛（25）が司の頬を軽く叩いて起こす。

急に起こされてまだ寝ぼけている司。

愛「私のいない間に女を連れ込んだでしょ」

司「……いや？」

愛「正直に言つて。今なら怒らないから」

司「……今日、水曜だっけ？」

愛「先生が学会に行つてて臨時の休診なの。水曜以外

に来たらまずいの?」

司 「誰も来てないよ……あ、男友達は来たかも」

愛が司に眉ペンを突きつける。

司 「?」

愛 「私のじゃない眉ペンが洗面所に並んでただけど」

司 「あー……そついや友達の女の子が一緒に来たかも」

愛 「これは私のだよ!」

司 「そついうのやめてくれよ」

愛 「何ですぐバレる嘘をつくの? 電話を何回鳴らし
ても出ないし。どうせまた飲んで自転車にも……」

司 「ちよ、ちよつと、責めるのは一日一個の約束だろ」

愛 「じゃあ……私、六月で三十歳になったじゃないで
すか。君の三十歳はまだ半年先かもしれませんが」

司 「はい」

愛 「私が三十になるまでに、って言ってた転職はどう
なりました?」

司 「まだちよつとお店が忙しくて」

愛 「就職活動は始めてます?」

司 「まだですが、始めればすぐ決まる見込みです」

愛が司の顔をじっと眺める。

司 「……何？」

愛 「顔を忘れないようにしようと思って。さよなら」

愛が居間を出ていくと、司は再び寝る。

商店街・路上

仕事中の司が愛に電話するも繋がらない。

マンション・玄関前（夜）

司が鍵を開けて中に入ると、金属製の物を踏んだ音がする。

電気をつけて足をどけると、愛に渡していた合鍵が三和土の上に落ちている。

ドアのチラシ投入口を見る司。

同・洗面台（夜）

化粧道具がなくなり、さっぱりしている。

鏡に口紅で何やら書かれているが、上から塗りつぶしてあって読めない。

二十四時間居酒屋・店内（夜）

司が客引きの仲間達に合流する。

司「彼女が出てった」

香山「え、慰めてもらいたくて来たの？」

司「全然。よくよく考えたらそんなに好きじゃなかった」

ミヤ「司君、強がっちゃって」

x x x

司「気持ち悪い、帰る」

勇太「めっちゃめっちゃシヨック、受けてんじゃないスカ」

ミヤ「この時間はお巡りがいるよ」

香山「今度捕まったら自転車の講習だろ？」

司「そんな間抜けじゃねえよ、バーカ」

ふらふらと店を出て行く司。

免許センター・表

職員の声「免許の更新、講習の方はこちらに並んでくだ

さいーい」

建物の外にまでできた行列の後ろの方に、部屋

着姿の司が並んでいる。

中からブランド服で身を固めた泉（29）が女C

を連れて出てくるのを見つける。

司 「泉君！」

泉 「……おお、司か。久しぶりだな」

女C 「誰？」

泉 「地元の奴。親父が俺らの中学の担任で」

司 「義理の父親がね」

泉 「そうそう。本当の親父はお袋と担任の不倫に気づいて自殺したんだよ」

司 「まあ癌で闘病中だったからどっちが原因で自殺したかは分かんないけど」

泉 「両方だろ」

女C 「えー、お父さん超可哀想。知らない方が良かったのに何で知っちゃったかな」

司 「現実なんて見ないに限るね」

泉 「車を回してきて」

車の鍵を渡すと、女Cが駐車場に向かう。

泉 「たまには実家に帰ってんの？」

司 「まさか。もう実家は捨てたよ」

泉 「お袋とは仲良かったのに」

司 「え、別に仲良くはなかったよ」

泉 「そうだったけ？ まあいいや。お前、客引きやってくるってな」

司 「え、誰から聞いたの？」

泉 「佐藤だったかな。やめとけよ、そんな人に媚びへつらう仕事。魅力がある人間には向こうから寄ってくるんだよ」

司 「ああ、もう辞めたよ、あんな仕事。今はサラリーマンをやってる」

泉 「俺にはよく分かんねえけど、人って希望がなくても生きていけんの？」

司 「……泉君は何をやってんの？ 羽振り良さそうだし、俺もその仕事がしたいな」

列は少しずつ進むが、泉が動かないため、仕方なく列の外に出る。

泉 「童貞には無理だよ。罪の童貞には」

司 「そんなにヤバい仕事なの？」

泉 「俺はただ金のある人生と金のない人生があって、金のある人生を選んだだけだよ。そこにリスクがあってもな。東京じゃ待ってるだけじゃ春は来ねえぞ」

泉が司の頬をぺちぺち叩く。

x x x

司が再び列に並んでいると、爆音を立てて走り去る泉の車が見える。

同・一室

プロジェクターで自転車事故の映像が流れている。

唯一の受講者である司は画面を見ずに、苛立つて前の椅子を蹴飛ばす。

商店街・路上（夜）

八百屋が轟音を出して燃えている。

司や浴衣を着た野次馬が困んでいる。

消防車のサイレンが聞こえる。

司 「うちの居酒屋から火事の様子が見れますよー。今なら燻製付きで。隅田川より迫力ありますよ」

勇太がやって来てミヤに耳打ちし、ミヤが司に耳打ちする。

ミヤ「八百屋の親父がまだ中にいるみたいよ」
驚き、客引きを中断する司。

店内から消火活動を断念した近所の住人が逃げ出してくる。

サイレンが止むと、消防隊員が走ってきて野次馬達に道を空けさせる。

司が消防隊員に押しやられる。

炎がぼおっと眺めている司の顔を照らす。

寺・境内

灰色の雲が空を覆い始めている。

祭壇に八百屋の遺影。

棺を霊柩車に乗せる八百屋の遺族。

同・表

司達参列者が道路の両脇に並んでいる。

司 「……俺らで葬式に来るのって初めてだよな？ この景色、見覚えあんだけど」

ミヤ「別の八百屋じゃない？ 八百屋は腐るほどいるし」
香山「八百屋は二度死ぬ」

抑えた笑いが客引き仲間から起きる。

司 「いつだったけな、完全にデジャヴなんだけど……」

司が周りを見回し宗介（29）を発見する。

ミヤ「宗介さんじゃん」

勇太「誰スか？ それ」

ミヤ「前に司さんと働いてたんだけど、通行人に財布を拾ってやって首になったんだよ」

勇太「え、親切じゃないスか」

司「あいつが財布を抜いてたんだよ。酔っ払いの財布を抜いて、落としましたよ、って親切ぶって二軒目を紹介すんだよ」

勇太「俺ならそのまま金を取っとくけどなあ」

霊柩車がクラクションを鳴らし、参列者の前を通っていく。

香山「（頭を下げたまま）一回焼けてんのに、また焼く必要あんの？」

司が頭を上げ、宗介と目が合う。

宗介はニヤツとしている。

隣にいる店長が宗介に話しかける。

司「……………」

居酒屋・内（夜）

司達と希子が喪服姿で飲んでいる。

ミヤ「八百屋が死んだってことは、本格的に再開発が始まんのかな」

希子「やだー。じゃあ、分かった！ 皆揃って別の街で働こうよ」

司「嫌だよ、また客引きなんて。皆、爺婆になったら一緒にやるうぜ」

希子「無理無理無理。若い子じゃないと客が止まんないって。私、今ですらヤバいのに」

ミヤ「じゃあ巢鴨でやればいいじゃん。客引きも爺婆。客も爺婆」

香山「何回も同じ説明をする奴な。（大声で）飲みホってというのは飲み放題の略で！」

勇太「あの……俺、今回の火事って再開発を狙った奴の仕業だと思っんスよね」

ミヤ「漏電だよ」

希子「司さんのポイ捨てでしょ？」

司「それ、結構前だよ」

勇太「火事のちよつと前にあそこら辺をつろちよろする怪しい奴を見たんスよ、俺」

司 「客引きだよ、それ」

ミヤ 「警察には言ったの？」

勇太 「怖くて言えないツスよー。次に俺が狙われるかも
知んないじゃないスか」

香山 「嘘つけ！」

ミヤ 「そう言うのって警察に言わないと駄目だよ。八百
屋が成仏できねえよ？」

司 「よし、今から行くか！」

勇太 「え、いいツス、いいツス！」

希子 「(店員に)すみませーん、お会計を！」

勇太以外、皆立ち上がる。

警察署・表(夜)

嫌がる勇太を引っ張っていく司達。

入口前に木刀を持って立っている警官がじっと
司達を見ている。

司 「(警官に)こいつが放火魔を目撃したらしいツス！」
司の後ろから別の警官が話しかけてくる。

警官 「何？ 何の用？」

勇太が司達を振り切って逃げ出す。

司 「あ、おい！」

司達も後を追うように一緒に逃げる。

住宅街（夜）

司が仲間とはぐれて一人で歩いている。

携帯を手にした所で、希子と出会う。

司 「再開発前にバラバラになっちゃったね」

希子 「悲しくなるからそんなこと言わないで」

司 「巣鴨で会えるって」

希子 「年を取ったら私に価値なんかないよ」

司 「大丈夫だよ、キッコはお婆ちゃんになっても綺麗

なままだって」

希子 「私には若さしか魅力がないの。今だって彼氏とセ

ックスレスなのに」

泣き出す希子を司が抱き寄せる。

司 「ひでえ彼氏だな。キッコが彼女なら一日最低三回はするね」

希子 「……あんな酷い死に方をするなんて。八百屋のおじちゃんはいつも野菜をくれたのに」

司の携帯に着信があるが、電源を切る。

司 「うちで飲み直そっか」

マンション・寝室（夜）

司が希子とセックスをしている。

一定のリズムで腰を動かしている司。

× × ×

同じ姿勢でセックスをしている二人。

司 「……いつからセックスしてるっけ」

希子 「……五分くらい？ 体位変える？」

司 「……さつきもこの会話した？」

希子 「？ してないよ」

司の汗が顎から希子の腹の上に落ちる。

× × ×

同じ姿勢でセックスをしながら会話する。

司 「……どんくらい経った？」

希子 「さつき聞いたばっか。何、嫌なの？」

司 「そうじゃなくて……何かずっと続いてね？ 永遠

に終わらないみたい」

希子 「良かったじゃん」

司の汗が顎から希子の腹の上に落ちる。

司 「さつきも汗が落ちたのを見たって！」

希子 「それがどうしたの」

司 「ループしてるって！」

希子 「だから何!? 意味分かんない！」

司 「この話もしたって！」

希子 「しつこい！ 嫌ならやめればいいじゃん！」

司 「この光景を見たって思うこの光景も見たって！」

司の汗が顎から希子の腹の上に落ちる。

司 「……思うこの光景も見たって思うこの光景も見た
って！」

司の汗が顎から希子の腹の上に落ちる。

司 「……思うこの光景も見たって思うこの光景も見た
って！」

司が急に希子から離れてトイレに向かう。

希子 「気持ちよくないならそう言えばいいじゃん！ 変
な言い訳して。何が六十になっても綺麗だよ。こん
な屈辱初めて！」

服を着る希子。

同・トイレ（夜）

司が便器を抱えて吐いている。

吐き終わると床にグラリと倒れこむ。

夢

女が男に引っ張られていく映像が、足元だけぼんやりと見える。

元のマンション・トイレ（朝）

床で寝ていた司が目覚めます。

夢の中で泣いていたことに気づく。

商店街・路上（夕）

司が道行く人にメニューだけ見せながら立っていると、視界の端に希子が見える。

希子「（通りすがりに）おはよござーす」

司「（希子を見ずに）うーす」

マンション・九階（朝）

酔った司がエレベーターから降りてくる。

司の部屋の前でユカがうずくまっている。

司「……え、いつからいたの？」

ユカ「待つことには慣れてるから」

司「オートロック」

ユカ「置き忘れてた漫画、返して」

司「もう捨てたよ」

ユカ「嘘だ。中を見せろ」

司「何でだよ、大体、お前、新しい奴をパクってっただろ」

ユカ「そつちは返すから」

司「でも今朝捨てたっつーか、昨日か……あ、まだ残ってるかも」

外でごみ収集車のバツクするピーピーッという

音が聞こえる。

司「あ！ごみ収集車が来た！」

エレベーターに走る司とユカ。

エレベーターが八階から下に降りている。

司「クソッ」

階段に向かう二人。

同・階段（朝）

階段を駆け下りる司とユカ。

同・ゴミ捨て場（朝）

作業員が古紙を収集車に運んでいる。

司の声「ちょっと待って！」

司とユカが走ってきて、作業員が手にしている

雑誌の束を見て、

司「それ、一冊だけ抜いてもいいツスカ？」

作業員「どうぞ」

作業員は雑誌を司に渡すと他の古紙を回収する。

ユカ「危なかったー！」

ビニール紐を解こうとするが解けない司。

ライターでビニールを焼き切ろうとするが失敗する。

司「熱っ！」

ユカ「（笑い）早く！」

司「鉄か何か持ってない？」

ユカが化粧ポーチをひっくり返し、地面の上に化粧道具がバラバラと散乱する。

司が紐を持ち上げてピンと張り、ユカが眉切り
鉋で紐を切る。

古い漫画雑誌を取り出し喜ぶユカ。

残った雑誌を作業員に渡す司。

司 「すみません。ありあした」

喜ぶユカの様子を見て、

司 「……うちででんぐり返しする？」

ファストフード店・外（夕）

店内で食事をしているユカと山田（37）の姿が

ガラス越しに見える。

ユカの声「最近ママの連れてきた男が超ウザくて。私に

ちよっかいを出してくんの」

カラオケボックス・個室（夕）

客Aがカラオケを歌っている。

店員がドリンクを置いて部屋を出る。

ユカが歌っている客Aのズボンを降ろす。

ユカの声「それを知ったママからの当たりがきつくてさ。」

そんなの私の知ったことじゃないじゃん？」

マンション・寝室

カーテンの隙間から日光が漏れる部屋で、司とユカが一緒に寝ている。

ユカの声「夏休み入って二日目にはもう家を出たね。どうせママはすぐ別れるからそれまでの辛抱なの」

司の声「高校は？」

同・ベランダ

ユカの声「さあ、ママが勝手に休学届を出すかもだけど、辞めてもどっちでもいいの」

ユカが愛おしげにサボテンに水を遣っている。

司の声「ちよっかいつて何？」

同・居間

ユカ「ん？」

司「やつぱいいいや、聞きたくない……意外とうまいじゃない」

司がユカの料理を食べている。

ユカ「（包丁を振り）でしょ、でしょ?」

司「危ない、危ないから」

ユカ「小さい頃から作らされてたからね」

司「そっぴや昨日の売り上げは?」

ユカが司に六千円渡す。

司「……六千ってことは昨日は三人相手したのか。頑張ったね」

ユカ「二十パーってボリ過ぎじゃない?」

司「馬鹿、世の中何でも二十パーなんだよ。客引きも二十パー。働き蟻の中でよく働くのが二十パー。人間の中で必要とされる割合も二十パー」

ユカ「司君はどっち側なの?」

司「俺は勿論二十パー」

ユカ「私は八十パーだなあ。小さい頃、花一匁でいつも最後まで残って嫌だったよ」

司がユカに新品の携帯を手渡す。

司「やる。いつまでも俺のをかわせるのは面倒臭えし。

使用料金は請求するからな。ゲームの課金も」

ユカ「きゃー! ありがとう! 一回ただで抜いたげよ

つか？」

司 「ビジネスパートナーとはそういうことはしないんだって？」

ユカ 「じゃあご飯を食べ終わったら一緒にどっか出かけようよ」

司 「やなことだ。スロット行くから。別に俺の休みに合わせずに働いて良いんだよ」

ユカ 「やなことだ！」

家・軒先

巣立った後のツバメの巣が残っている。

司の地元の商店街

通行人の半数ほどが長袖を着ている。

薬局・内

大きな買い物袋を提げた愛。

防虫剤を手に取りレジに並ぶと、前の客も同じ

防虫剤を持っていることに気づく。

前の客の声「（携帯で）もう夏じゃないよ。秋の先っぽ

に触れた感じがしたよ」

愛が、会計を済ませてすれ違う前の客（ユカ）の顔をちらっと見る。

同・表

薬局から出てきた愛の歩く先に、ユカが歩いて司のマンションに入っていく。

マンション・エレベーターホール

愛がボタンを押して、九階に止まっているエレベーターを呼ぶ。

同・司の部屋の前

愛がインターホンを押すと司が顔を出す。

司 「あれ？」

愛が勝手に中に入り、買い物袋を置く。

愛 「重かったあ……君は無精だからさあ、防虫剤も交換してないでしょ。私があげたサボテンは枯らしてない？ 栄養剤を買ってきたから」

玄関を上がるうとしたところでユカが居間から

顔を出す。

ユカ「誰？」

愛「……誰？」

司「えー……今、行くところがなくて家に泊めてる子」

ユカ「前に言ってた元カノ？」

司「元カノっていうか……まだ別れてないんだっけね？」

ユカ「嘘だよ！ 別れたつつつてたじゃん！」

司「どうだっけな」

ユカ「（愛に）今更戻っても遅いからね！ ちゃんと掴んどかないのが悪いんだから！」

ユカが司の股間を掴む。

司「（手を払い）やめろ、誤解すんだろ！ あっち行ってる！」

ユカを居間に追いやる司。

愛「……何？ 高校生と付き合ってたの？」

司「十九？ とかだよ」

愛「どう見ても高校生じゃん」

司「そう？ でも何もしてないよ」

愛「分かっていると思っけど一ミリも信じてないよ。そ

れよりさつき見えたけど、リビングの壁にかかっているカレンダー、何？ お金が入ってる奴。貯金には見えないけど」

居間の壁にかかっている、ポケットがついたカレンダーのイメージ。

ほぼ毎日小銭やら千円札が入っている。

司 「俺はね、ちつぽけな人生を捨てて、お金のある人生を選んだだけだよ」

愛 「ちつぽけな人生って何？ 私もその捨てられたちつぽけな人生に入ってるの？」

司 「いや、ちつぽけな人生ってのは……」

愛 「（遮り）ねえ、司君は何がしたいの？」

司 「……」

靴を履き、帰ろうとする愛。

愛 「周りには言わないでおいてあげるわ。ていうか恥ずかしくて言えないわ」

愛が出ていくと、司が急いで居間に入る。

同・居間

司が居間に入ると財布や鍵など外出する準備を

する。

司 「お前、余計なことを言うなよ」

ユカ 「私は司とセックスしたっていいもん」

司 「俺は好きな人としかセックスしないの」

ユカ 「私もそうだよ」

司 「……サボテンの栄養剤があるらしいからやっとい
て。スロット行ってくるわ」

急いで外出する司。

ユカ 「……」

住宅街

歩いている愛に司が走って追いつく。

司 「ちょ、ちょっと！ 一つだけ！」

愛 「……何？」

司 「前もこの状況で別れ話したよね？」

愛 「はあ？ この状況って今の状況？」

近くで昼休みの土方数人が寝ている。

聞かれたくなくて、歩き出す。

愛 「別の女と間違えてんでしょ」

司 「いやいや、確実にこの流れだった」

愛 「ないない、百パーない」

司 「そつか……最近デジャヴが多くてさ。しんどいんだよね」

愛 「慢性的にデジャヴを感じる病気はあるらしいけど、君は違うと思うよ」

司 「何で？」

愛 「その病気は不安が原因らしいから。君は不安なんか抱えてないでしょ？」

司 「あはは、そうだね。そりゃ俺とは無縁の病気だね」
無言で歩く二人。

愛 「……何でついてくるの？」

司 「いや、駅前のパチ屋に行こうと思って踵を返す愛、その後姿を眺めている司。

マンション・ベランダ

ユカが湯気の出ている熱湯をサボテンにかけている。

同・同（日替わり）

司が茶色く枯れたサボテンを手に取る。

司 「栄養剤やった？」

ユカ「うん」

司 「じゃあ何で枯れてんの」

ユカ「毒だったんじゃない？」

司 「……そーいや前に使うな、って言ったコップ知らね？ なくなってたんだけど」

ユカ「さあ、私は触ってないよ」

司 「ふーん……」

サボテンをゴミ袋に入れる司。

商店街・路上（夕）

勇太「司さん！ 司さん！」

勇太が司を呼んで、司が勤める居酒屋の看板に張られた紙を見せる。

司 「……」

勇太「（司に）知ってました？」

ミヤ「馬鹿、司さんの顔を見りゃ分かんたる」

勇太「司さんとこが閉まんだったら、そのうちうちの」

店も閉まんじゃないスか？」

ミヤ「だろっね」

勇太「え、どうすんスカ、潰れた後とか」

ミヤ「潰れた後に考えるよ。とりあえず今は」

居酒屋に入っていく司。

ミヤ「……潰れる日まで客を呼ぶんだよ。今日も明日も。

そういう仕事だろうが」

客引きを再開するミヤ。

司の居酒屋・厨房（夕）

店長が仕込みの確認をしている所に司が入って
くる。

司「十一月いっぱい閉めるの？」

店長「そうだよ。（バイトに）おい、エビ少なえぞ、解凍しとけよ」

司「何で教えてくんないの」

店長「だつてお前ら、明日どうなるか分かんねえ方がいいんだろ？ 安定した俺らと違って。（バイトに）
何でエビをこんな所に出しっぱにしてんだよ！ 食中毒が起きたら心中してもらうつからな！」

司がその場を立ち去る。

マンション・表（早朝）

新聞配達が止めていたバイクのスタンドを蹴つてバイクを走らせる。

同・居間（早朝）

酔った司が帰宅する。

ユカが録画したテレビ番組を見ている。

ユカ「おかえり。これ好きなんだよねー。素人の歌のオーディション。超うまくない？」

司「（歌を聴き）マジで言ってるの、お前。吐き気がするから止めてくんねえかな」

ユカ「えー、何で。上手いのになあ」

再生を止めるとニュースが流れる。

司が足を止め、考え込む。

司「……このシーン、前も見たことがある」

ユカ「言うと思った」

司「……」

ユカ「ねえ、見て。新宿で通り魔だって。怖いねえ。こ
ういうのに巻き込まれないだけうちらはまだ幸せだ
ね」

司 「お前、その人の不幸と比べて自分を慰めるのはやめるよ。みつともねえ」

ユカ 「別にいいじゃん！ そうしなかったら今頃リスカしてるよ」

司 「そんなに絶望するようなこともねえだろ」

ユカ 「自分はどつなの。あ、絶望してるか。立たないもんね」

司 「何だそれ。立つし」

ユカ 「立たないね」

司 「立つよ」

無言で服の上からユカの胸を揉む司。

ユカが司の股間を掴み、お互いに真顔で愛撫する。

テレビの声「午後から晴れ間が広がるでしょう。秋の日

射しが……」

司がテレビを消し、ユカのバジヤマに手をかけた所で手を止め、ユカから離れる。

司 「……分かったら、これで」

ユカ 「何で止めんのか。まだ前の彼女のことを忘れらんないの？」

司 「前の彼女？ ああ、まさか」

ユカ 「じゃあ何？ 私の体が汚いつての？！」

司 「ビジネスパートナーとはしないっつってんじゃん。
しっけえなあ」

ユカ 「良いよ、別に。司としなくても他で満足してるし」

司 「ウリはやってねえんだろ？」

ユカ 「常連とはやってるよ」

司 「危ね、汚ね！ 知らねえ男とやった後に触る所だった。つーか、じゃあ金払えよ」

ユカが司にリモコンを投げつける。

リモコンの電池が外れて、飛び散る。

司 「おい！！」

ユカがパジャマの上から服を着て、鞆に手近な物だけ詰め込んでいく。

司 「漫画を忘れんなよ！！」

ユカ 「体を売ったつて、人からどんなに馬鹿にされたつて私は汚れてなんかないんだよ！！」

ユカは古い漫画を引っ掴んで出て行く。

司が飛んでいったリモコンの電池などを拾い集

め、テレビがつくか確認する。

テレビの声「……今日最も悪い運勢は水瓶座。困っている時は早めに専門家に相談してみると良いかも」

ファミレス・外観（夜）

ユカの声「休みの日はどこにも連れてってくんないしさ
あ
」

同・内（夜）

食事を終えたユカと山田の席に、店員が水を
ぎ足しに来る。

ユカ「チャラいし、見栄っ張りだし……すげー馬鹿なん
だよ。聞いてよ！」

山田「ずっと聞いているよ」

ユカ「名古屋を市だつて言っただよ!？」

山田「……合ってるよ」

ユカ「あれ?……ああ、間違えた。名古屋を県だつて言
ってたのか」

山田「何か聞いている分には恋人の痴話喧嘩みただけど

ね」

ユカ「どこが!? 私が体を張って稼いだ金を巻き上げん

だよ!? 鬼畜だよ、鬼畜」

山田「おー、難しい言葉を知ってるね」

ユカ「馬鹿にしてんの?」

山田「俺、明日早いからそろそろ行かない?」

ユカ「ほーい、でも本番は禁止だよ?」

山田「何回も聞いたよ」

商店街・路上（夜）

司「ちよつと病院に行つてくる」

香山「こんな時間に? 何、性病?」

司「お前みたいな馬鹿は罹らねえ病気だよ」

香山「え、何で俺がデイスられんの」

前掛けを外し、路駐の自転車の上に置く。

別の駅・表（夜）

駅から出てきた司が、辺りを見渡してから歩き

出す。

雑居ビル・表（夜）

司がビルを暫く見上げて中に入っていく。

同・ドア前（夜）

ドアに**心療内科と書かれている。

ドアノブに手をかけた状態で司の手が止まる。

アパート・一室（夜）

ユカ「んー！」

ユカがボール型の口枷をして、ラックに手錠で拘束されている。

後ろから抱きつき、ユカの体を弄る山田。

山田「お前みたいな奴は体を売ってなんぼだろが。半端に清纯ぶってんじゃねえよ。守るものなんか何もねえくせに」

暴れるユカの背中を殴って鎮静する山田。

ユカが泣いていると、スマホの動画起動音がして振り返る。

山田「お、泣いてるの？ いいねえ。それは痛いから泣いてるの？ 悲しい？ 悔しい？ まあ喋れないか」

ユカが画面に収まるようにスマホの位置をセツトする山田。

ユカが足を延ばし、壁を何度も強く蹴る。

隣の部屋の住人が壁を殴り返してくる。

山田「おい、やめろ！」

壁を殴る蹴るの応酬が続く。

山田「分かった、わかった！ やめるから！ それも外すから！」

壁を蹴り続けるユカを抱きすくめる。

隣のドアが開く音がしてチャイムが鳴る。

顔を見合わせるユカと山田。

チャイムが連打される。

商店街・路上（夜）

香山が前掛けを絞めている司を見つける。

香山「あれ、もう行ってきたの？」

司「やめた、あそこじゃ治んねえ」

香山「何で？」

司 「前に行ったことがあった」

香山 「嘘だよ。絶対アレだよ、チン毛を剃ってすぐ終わったパターンだよ」

マンション・玄関（深夜）

酔った司が帰ってくる。

足下にユカの靴があるのには気づかない。

同・寝室（深夜）

真っ暗な中で司がベッドに倒れ込む。

司 「うおー！」

部屋の電気をつけるとユカが寝ている。

ユカ 「……眩しい」

司が電気を消す。

ユカ 「私、こっに見えてカレーが好きなの」

司 「へえ」

ユカ 「煮込みつて眠るのに似てんじゃん。ごろっとした塊が溶けていくとことか。心に残った色んなごろんとした嫌なことが溶けてく感じが。溶けるまでひたすら寝るの」

司 「じゃあ好きなだけ寝ろよ」

ユカ 「うん、寝てたのに今起こされたの」

司 「悪かったね、許してよ」

ユカ 「頭を撫でてくれたらね」

司 がユカの頭を撫でる。

鯛雲（夕）

司の居酒屋・表（夕）

司が仕事を始めるため、前掛けをしながら表に出てくると、通行人がひそひそ話ながら後ろを振り返っている。

視線の先では、宗介が司と同じ店の前掛けをして客引きをしている。

司 「（ミヤに）何でいんだ、あいつ」

ミヤ 「歌舞伎町でぼったくってたのを警察に目をつけられて、それで逃げてきたんだって」

司 「誰かが呼んだの？」

ミヤ 「分つかんない。もう潰れるから、って店長が呼んだのかな。仲良くやりなよ」

客引きをしている宗介。

× × ×

宗介「(通行人に)すみません、こちら辺で最寄りの駅ってどこツスカ？」

電柱に凭れて宗介の客引きを見ている司。

宗介「ありがとうございます。お礼に安い居酒屋を紹介しますよ。駄目ですか？どうしても？ どうしても駄目？ 安いのに？」

通行人が宗介から逃げていく。

宗介「(司に)何、見てんだよ、こちら目を逸らす司。

宗介「そっぴや前から聞きたかったんだけど、お前、犬好き？」

司「……まあ」

宗介「犬好きの奴を、犬、って呼んだら尻尾振って喜ぶの？」

司「喜ばねえよ」

宗介「何だ、人のことをチクするような奴は犬って呼んで欲しいのかと思ってたよ」

煙草の残りを確認してその場を離れる司。

商店街の外れ・喫煙所近く

通りがかつた司が証明写真ボックスの前面についている鏡で髪型をチェックする。

と、ボックスから撮影を終えたスーツ姿のミヤが出てくる。

ミヤ「うおっ」

司「うおっ」

ミヤ「……今から面接なんだよ、ルート営業なんだけどさ。正社員だし、俺もいつまでもこんな仕事やってらんないし」

司「そっか、頑張れよ」

ミヤ「司君もそろそろ就活を開始した方がよいよ」

商店街とは逆方向にミヤが立ち去る。

マンション・居間（深夜）

携帯で職を探している司。

司「給料が減るけど仕方ねえなあ……事務ってどんな仕事をするんだろっね」

ユカ「……コピーを取ったりとか？ 今度はキャッチを

やらないの?」

司 「雨の日は座って屋内で働きたいしき。もう一生分は人から無視されたし」

ユカ 「そんなの慣れっこじゃん」

司 「無視されることに慣れてる自分が嫌なんだよ」

ユカ 「自分ですら自分を愛せないなら、誰からも愛されないよ」

司 「お前はさあ、自分を愛せてるの?」

ユカ 「私は自分が大ッ嫌い。だから誰からも好かれないの……司以外はね!」

司 「お、どこからその誤解が生じるのか、ちょっと深く掘り下げてみようか」

ユカ 「イチヤイチャするってのは、同じ話を繰り返すことだと思っの。例えば名古屋県って言ってたよね、

とか。お前、料理上手いじゃん、意外と、みたいな」
司 「それで?」

ユカ 「それで司君がよく言う、この会話を前もしたことがあるっていうのは私とイチヤイチャしたい証拠なの」

司 「最近それが起きなくなっただってことはもうイチヤ

イチャしたくないってことか」

ユカが笑いながら司を叩く。

商店街・路上（夜）

司がいつも凭れている電柱に宗介が凭れかかっている。

勇太「そこ、司さんの電柱スよ」

宗介「電柱に縄張りがあんの？ あいつマジ、犬だな！

マジ犬。店長にチクつたりよあ」

司が来て、勇太を手で追い払う。

司「お前、わざとそこにいるだろ」

おもむろに電柱に小便をする宗介。

通行人が顔をしかめて通り過ぎる。

司「……何やってんの」

宗介「犬のルールに合わせてやってんだよ。そついやお

前、インポなんだって？」

司の耳に離れた所で客を引いている希子の声が聞こえる。

希子の声「カラオケはいかがですかー」

司「インポじゃねえよ。じゃあお前は一生その電柱に

いるよ」

　　通行人の客引きに戻る司。

司 「二軒目お探しですか。なら食事はそんなにしない
スよね？ 今ならお一人様……」

宗介「（割り込み）駄目ですよ、そいつインポなんで。
うつりますよ。俺なら更にファーストドリンクを無
料にしますよ」

　　断る通行人についていく宗介。

　　司の携帯が鳴り、メールを読む司。

　　舌打ちをして客引きを再開する。

司 「どースカ、居酒屋。二軒目」

男F「酒はもういい。女の子を紹介してよ」

司 「あつちに風俗がありますよ」

男F「ああいう商売女じゃなくてさあ、分かるでしょ？

お兄さん」

司 「……いるにはいますけど、高いスよ？ 仲介料も
貰いますけど」

マンション・居間（深夜）

　　司が片目を瞑って携帯を見ている。

ユカ「何見てんの？」

司「就活サイト」

ユカ「そついやこないだ言つてた奴はどうなったの？」

司「どれ？ まあどれでも一緒だよ。今の所、全部書類選考で落ちてっから」

ユカ「それでそんな変な顔をしてんだ？」

司「自然にこうなんだよ。多分体が見るのを拒否ってんだろっな」

ユカ「そんなことより私、来週誕生日なんだけど！」

司「おめでとっ」

ユカ「こないだテレビで見たんだけど、四谷洋菓子店って店のケーキが食べたいなあ」

司「仕事が決まったらな」

片目を閉じたまま仕事を探す司。

黄葉した銀杏並木

商店街の外れ・喫煙所（夜）

司と高安が煙草を吸っている。

高安「何か最近この商店街で女の子を幹旋してる奴がい

るらしくてさあ。ツカっちゃん何か知らない？」

司 「さあ、聞いたことないツスね」

高安 「もしそいつがツカっちゃんの仲間でも筋は通させてもらうけどいいかな」

司 「仕方ないスよね！。でも筋って何？」

高安 「筋は筋だよ、ツカっちゃん」

適当にわかった振りをして頷く司。

マンション・居間（夜）

司が漫画から顔を上げて時計を見る。

再び漫画に目を落とす。

が、集中できずに漫画を放り投げると、服を脱ぎながら浴室に向かう。

居間にシャワーの音が聞こえてくる。

x x x

ユカがフライパンで銀杏を炒めている。

司が風呂から出てくる。

司 「……臭え！ ウソの臭いがするぞ」

ユカ 「銀杏を拾ってきたからね。昔はよく拾って食べてたんだよね。私はお腹いっぱいだけど司君は食べる

でしょ?」

司 「今日は仕事なかったんじゃねえの?」

ユカ 「そうだよ。今日は誕生日だからアブラモビッチが
四谷のお店でケーキを買ってくれたの。超ヤパかつ
ただけど!」

司 「誰だよ、何とかビッチって」

ユカ 「前に言わなかったけ? ガテン系の常連。二十
歳くらいの」

司 「……四谷何とかって店内で食えんの?」

ユカ 「うん」

司が冷蔵庫からケーキの箱を取り出し、ユカに
見せる。

箱には四谷洋菓子店の名前が入っている。

司 「どこで食ったって?」

ユカ 「……公園」

司 「おい」

ユカ 「ラブホ」

司 「セックスは?」

ユカ 「した」

司 「金は取った?」

ユカ「ホテル代は出してもらった」

司「それつてもう恋人じゃねえか」

ユカ「違いし。もしそつだとしても司には関係ないじゃ

ん！ 私達、付き合つてんの!？」

司「……………んなわけねえだろ。どうしてそうなんだよ。

馬鹿か？」

ユカ「……………」

沈黙を銀杏の爆せる音が埋める。

車・内（夜）

ユカが助手席に乗り込むと、ドアをバン！と閉める。

ユカ「ロックはかけないで。お金は前払いで」

運転席の男が帽子とサングラスを取る。

男（五十嵐（40））を見て驚くユカ。

五十嵐「探したよ、ユカちゃん」

駅・改札付近（夕）

構内の時計は四時四十分を指している。

ユカは手帳を見ながら電話を掛ける。

ユカ「もしもし、久しぶり……っん、元気元気。ねえ、

あの男がもう家から出てったか知ってる？」

元の車・内（夜）

ユカ「真由美がどの出会い系を使ってるか聞いてきたの

もあんなのためだったの!!」

五十嵐「ユカちゃんがこんなことをしてるなんてパパは

悲しいよ？」

ユカ「誰がパパだよ、気持ち悪いな」

五十嵐「こないだ籍を入れたんだよ、ママと。分かる？」

結婚だよ、ケッコン」

ユカ「嘘でしょ!」

五十嵐「だからさ、このまま家に帰ろっか。わざわざ車

を借りて東京まで来たんだよ」

ユカ「嫌だ」

五十嵐「それは、あれかな？ ツカサとかいう男のせい

で？」

ユカ「……………」

五十嵐「もし戻らないならパパはその男を未成年者略取

誘拐で訴えてもいいんだよ？」

ユカ「何それ！ 私が押し掛けたんだよ」

五十嵐「更に未成年者に性的サービスをさせて金を取っ

てたならどんな罪になるかね」

ユカ「あんたのやることの方がよっぽど汚い」

五十嵐「別にずっと一緒にいるとは言っていないよ。高校

を出るまでの辛抱だよ」

五十嵐が車を出し、ユカがシートに身を委ねる。

商店街・路上（夜）

男F「お、いたいた！」

男Fが男Gを連れて司の元にやってくる。

男F「お兄さん！ こいつにもこないだの子を紹介して

あげてよ」

司「あー、もうあれやってないんすよ」

男F「そんなこと言わずに！ こいついい奴なんだよ。

ただこつという経験がなくて」

男G「いや、いいですよ、僕は」

男F「こついつのは一回は経験した方がいいんだって。ああ、こついつもんか、くらい知っとくだけで

違つんだから。だから、な！ 頼む！」

司「ちよつと、声がデカいよ。参つたな」

高安が遠くにいることを確認する司。

司「じゃあちよつと電話だけしてみるんで」

男F「おお、ありがとう！」

車・内（夜）

携帯が鳴り、出ようか迷っているユカ。

五十嵐が携帯を奪うと窓から外に投げる。

ユカ「あつ！」

五十嵐「新しいの買ってあげるよ」

ユカが急にサイドブレーキを引き、車が軽くスリップする。

後ろの車に衝突される。

ユカ「もし司君を訴えたら、私も今までされたの、全部警察に言つからね！」

車を降りて走って逃げるユカ。

五十嵐「おい！」

五十嵐も車を降りようとするが、後ろの車に乗っていた男に窓をノックされる。

商店街・路上（夜）

司がユカに電話するが繋がらない。

司「ごめんなさい、ちょっと今繋がらないスね」

男F「そんなー！　ねえ、じゃあ他の子を紹介してよ」

司「他の子なんていないスよ」

男F「えー、困るよお」

男G「もういいですつて。帰りましようよ」

マンション・寝室（深夜）

司が寝室に入るとユカが寝ている。

司「寝てんのか。何で電話に出ねえんだよ」

ユカ「（布団の中から）……携帯なくした」

司「え？」

ユカ「（布団から出て）携帯なくした！」

同・表の道路（深夜）

路面清掃車がシャーッと音を立てて道端を清掃していく。

同・寢室（深夜）

電気が消えたままの室内。

司「そのおっさんが警察に駆け込む可能性はあんの？」

ユカ「そんなこと、私がさせない！」

司「いや、意気込みじゃなくてさ」

ユカ「二度と来ないようにやっつけてよ」

司「無茶言っなよ。それこそ警察沙汰だろ」

ユカ「アブラモビツチならやっつけてくれるのに」

司「じゃあ連絡しろよ」

ユカ「全部連絡先が消えたの！」

泣き出すユカ。

司「まあそんな奴なら警察には行かねえか。俺の携帯も住所も言ってないんだよな？」

頷くユカ。

司「居酒屋の客引きと司って名前だけじゃまずここが割れることはねえだろ」

ユカ「……ヨーグルト！」

司 「何？ 呪文？」

ユカ 「ヨーグルト、買ってきて！」

司 「泣いてんなら塩分の補給じゃねえの」

ユカ 「うるさい！ ヨーグルト！」

司 「はいはい……プレーン？ 甘い奴？」

ユカ 「甘い奴！」

部屋を出て行く司。

二十四時間居酒屋・外觀（深夜）

宗介が入っていく。

同・内（深夜）

宗介が司達のグループに混ざる。

勇太 「珍しいツスね」

宗介 「クソー、待ち合わせをぶつちぎられた」

勇太 「彼女スか？」

宗介 「いや、出会い系」

ミヤ 「さくらじゃないんスか？」

宗介 「俺が使ってるアプリは結構ね、男は有料だからし

っかりしてんだよね」

司 「何てアプリ？」

宗介 「お前はインポだから関係ねえだろ？」

司 「違えつつってんだろ」

勇太 「え、インポなんスか？」

香山 「違えよな、司は性病だもんな」

ミヤ 「お前が入ってくると面倒になんだろ」

香山 「何で？ 性病の方がましだろ？」

勇太 「インポで性病なら最悪じゃないスか」

ミヤ 「待て待て、インポなら性病もうつさないから平和

じゃね？」

宗介 「いいよ、じゃあ。お前に選ばせてやるよ。今回だ

けな？」

司 「インポか性病か？」

宗介 「そう。さあ、どっち！」

司 「……」

司はくだらなさに、不愉快だった表情が崩れて
しまう。

マンション・寝室（夜）

横になっているユカに司が新携帯を渡す。

司 「出会い系のアプリを入れといたから。こっちだとおっさんにもバレてないし登録制の分、変なものも少ないらしいよ」

ユカ 「……涙も鼻水も私から逃げたがってる。私が今まで逃げてきたから、体も私から逃げ出そうとしてるし。私も私から逃げたい」

司 「ただの風邪だろ。労災を申請しろよ」

ユカ 「何それ？」

司 「いや、俺らには関係なかった。そういやお前、保険証持ってんの？」

ユカ 「持ってない」

司 「じゃあ駄目だな。病院に行ったらこれまでの三倍以上金がかかるぞ」

ユカ 「意味不明」

司 「じゃあ治ったら二人で遊びに行くか？」

ユカ 「マジ!? じゃあ治った。今から行くー!」

司 「嘘つけ。でもどうせ出かけるなら昼間の方が良いだろ。お前は飲まねえし、俺はカラオケ嫌いだし」

ユカ 「駄目、今じゃないと。良いことがこう……滑り落

ちっちゃうかも知らないから」

司 「じゃあ出かける準備しろよ」

ユカ 「先に出かけてて」

司 「何だよ」

ユカ 「待ち合わせた方がデートっぽいつしょ」

公園・内（夜）

十一時半を指す公園の時計。

司が砂場で小さい子供と遊ぶ若い母親を見ていると、ユカがやってくる。

ユカ 「ごめん、待った？」

司 「一本飲みきるまで待った」

空の缶ビールを振る司。

ユカ 「ブーツ、不正解」

司 「俺も今来たところ」

ユカ 「よしよし」

砂場の親子を見つけ、暫く見ているユカ。

ユカの横顔を眺めている司。

ユカ 「……どこ行こっか？」

商業ビル・内（夜）

十二時に閉まる商業ビル。

警備員が閉鎖の準備をして回っている。

司とユカが止まったエスカレーターに渡してある鎖をそっと跨いで上っていく。

× × ×

廊下の電気はまだ点いているが、店舗には格子状のシャッターが下りている。

静まり返った中を、司とユカがウインドウショッピングをしながら歩いている。

ユカ「司君、ああいう帽子、似合いそう」

司「ハンチング？ 嫌だよ、趣味じゃねえ」

ユカ「そうかなあ、可愛いと思うけど。ねえ、緑の服を持つてる人はO型なんだって」

司「俺、A型だけど持つてるよ」

ユカ「あ、この服、超可愛い。ねえ」

司「開いてたら買ってやったんだけどなあ、超残念」

ユカ「明日でもいいよ？」

司「駄目駄目、こつこつのは運命だから。神はサイコロを振らないの」

ユカ「何それ」

司「何だっけ」

シャッターの外に、駄菓子屋にあるゲーム筐体が置いてある。

ユカ「何で出しっぱなんだろ。捨てんのかな」

司「十円あればできんじゃないね？」

司は筐体をコンセントのある所まで引きずりプラグを差す。

派手で安っぽい電子音が辺りに響く。

口の前で指を立て、ユカが司を叩く。

十円玉を入れてゲームに興じる二人。

司がゲームをクリアし、喜ぶユカが景品取り出し口を覗くが何も出てこない。

司「あれ、何も出ねえ」

ユカが取り出し口に手を突っ込む。

司が笑う中、無理矢理景品を取り出す。

不細工なキャラクターが出てくる。

司「いらねー」

ユカ「でも折角司君がくれた奴だしね」

司「仕事さえ決まったら何かちゃんとした奴をやるよ」

背後で足音がして、走って逃げる二人。

同・女子トイレ（夜）

電気が消えたトイレには廊下からの光が僅かに届いている。

個室を開いた扉の裏に、司とユカが身を寄せ合
って隠れている。

警備員がトイレに入ってきて個室を順番に懐中
電灯で照らしていく。

更に身を寄せる二人。

警備員が司のいる個室を照らす。

司がユカに静かにキスをする。

警備員がドアを少し開き、二人が懐中電灯に照
らされる。

警備員「何やってんの!」

司「いや……」

ユカが司にもう一度キスする。

路上（深夜）

ビールを飲みながら司がユカと手を繋いでいる。

司 「そろそろ本格的に就活しねえとなあ」

ユカ「早く転職して、さっきの服を買ってね」

手を繋いだまま、ガードレールを挟んで歩いていく二人。

マンション・居間

棚の上にユカが取ったキャラクターが置かれている。

雑居ビル・一室

司がブースに座っていると、資料を持った転職エージェントが戻ってくる。

男H「弊社以外に転職エージェントは登録されていますか？」

司 「いや、ここだけです」

男H「今までとは全く違った業種でお探しのということですか？」

ー…………正直い…………厳しいです」

司 「分かっています。二、三十応募して書類選考に一つも通らないので」

男H「なので、もう少し履歴書や職務経歴書を、まあ何

て言うんですかね。誇張と言いますか、デコレーションと言いますか」

司 「まあ、入社してしまえばこっちのもんスからね」

男H 「例えばそうですね……キャッチで外国人のお客さんでも声を掛けます？」

司 「そうスね、ほとんど日本語ですけど」

男H 「でしたら語学欄に、英会話可能、とかですね。後、今まで一時間に最高で何人引けました？ 結局、どの分野に行っても俺は優秀だぞ、というアピールをしたいんで」

司 「最高三十六人ス」

男H 「三十六！ すごいッスね。もうそこは四十にしちやいましょう！」

司が笑う。

男H 「良いッスね、その笑顔。笑顔は大事ですよ。面接ではとりあえず笑っとけばそれだけで印象が良くなりますからね。とりあえず一件良い所があるんで紹介しますね」

マンション・居間

スーツを着た司をユカが褒めている。

雑居ビル・一室

スーツ姿の司の前で、苦虫を噛み潰したような顔をした面接官が書類を見ている。

面接官「ちよつとさ、派遣会社に言つといて。数だけ送

りゃいいってもんじゃないって」

司「（笑顔）じゃあ帰った方が良いスか？」

面接官「一応面接はするけども……ポン引きをやってるって？」

司「いえ、居酒屋のキャッチですね」

面接官「ポン引きと何か違うの？」

司「ポン引きは風俗店のキャッチで……」

面接官「分かった分かった。じゃあ俺を勧誘してみて」

司「この場ですか？」

面接官「そりゃそうだろ。何で俺が君の働いてる所までわざわざ出向いて呼び止められなきゃならないんだろ」

司「じゃあここに居酒屋を出してください」

面接官「一休さんか」

笑っている司。

面接官「（履歴書を見て）……音楽学校を中退して何をやってたの？ バンド？」

司「はい、ボーカルをやってました」

面接官「で、三十になっても成功しないから解散して就職するパターン？」

司「（笑い）ありがちなね」

面接官「ここ以外に受けて通ったところある？」

司「いえ、ここを最初で最後の就活にしようと思っ
ます」

面接官「これじゃどこを受けても通らないよ。何のスキルもないもの。ポン引きで何人引けたとか言われてもうちには全く関係ないし。君みたいな子はよくいるんだよ。長年同じ仕事をして偉くなったからって、他の仕事もできると勘違いする子。理想ばっか高く
て、中身が全く伴ってない。自分がいかに何もできないか自覚する所から始める」

司の笑顔が消える。

面接官「まあ今回は特別に雇ってやるけども」

司「……え？」

カラオケボックス・非常階段（夜）

司が煙草を吸いながら街を眺めている。
携帯にメッセージが届き、中に入る。

同・廊下（夜）

司がトイレから出てきた油谷（20）とすれ違い
ざまに同じ方向に避けてぶつかりそうになる。
舌打ちをして司の横を通っていく油谷。

司 「おーお……」

うんざりした表情で部屋に入っていく。

同・一室（夜）

ユカがカラオケを途中で止める。

ユカ「（マイクで）おめでとー!!」

ユカが司にマイクを渡す。

司 「あそこに行くかどうかまだ分かんねえよ。キャッ
チを辞めるまでに他がなかったら行くかなあ、くら
いで」

ユカ「でも良かったじゃん！ 他から必要とされてるってことはいいことだよ」

司「まあなあ」

司が選曲して歌いだす。

ユカ「超うまいじゃん！ サラリーマンより歌手の方が

向いてるって！」

司が間奏で曲を止める。

ユカ「えー、何で止めんの！？」

司「帰るぞ」

ユカ「そんなに上手いんだったらオーディション番組に出れるんじゃない？」

司「もう音楽は辞めたんだよ」

ユカ「やっぱギターは司君のだったんだ。バンド？」

CD聞かせてよ」

司「やだよ、もうきつぱり辞めたんだよ」

部屋を出ていく司。

ユカ「ちよっと待って！」

街・全景・小雨（夕）

商店街・路上・雨（夕）

雨が強くなり、通行人が傘を差し始める。

腕を組んで道路の真ん中に突っ立っている司が、
通行人の仕事中の姿を想像する。

司のイメージ

電話を受けながら、PCを操作している若い女性。
性。

会議室で大勢の前でプレゼンをしている男性。
オーディション番組で歌っている司。

元の商店街・路上・雨（夕）

傘を差した通行人が、濡れて立っている司を避
けていく。

x x x

小雨の中、司が客引きをしているが、無視して
いく通行人たち。

通行人に後ろからぶつかられ、よろめく。

司は客引きをやめ、通常の音量で東京事変の『透

明人間』を歌いだす。

司 「僕は透明人間さ きつと透けてしまっ」

近くにいた宗介が続きを歌う。

宗介 「同じひとには判る 噂が走る通りは息を吸い込め止めた儘で渡ってゆける」

司・宗介 「秘密も愉しいけれど直ぐ野晒しになるよそれを笑わないで」

周りにいたミヤや勇太も合唱に加わる。

一同 「好きなひとやものなら有り過ぎる程有るんだ鮮やかな色々」

通行人が笑いながら司たちの動画を撮る。

一同 「あなたが笑ったり……」

マンション・居間（夜）

歌のオーディション番組が流れている。

司 「これ、見たくねえつつつたる」

ユカ 「まあまあ、そう言わずに、兄貴」

司 「何でご機嫌なんだよ」

ユカ「実はね、司君のCDを番組に送ったの」

司「はあ!? てめえ、勝手なことをすんなよ。俺がど

んな思いで諦めたか分かってんのか!」

ユカ「そんなこと言って、ギターはまだ持ってんじゃん!

未練あんじゃん!」

司「あれはそのうち売るんだよ……で、その発表が今

日あんの?」

ユカ「ないんじゃない。今日CD送ったから」

司「つーか多分放送前に連絡が来るよ。連絡先にどっ

ちの携帯番号を書いたの?」

ユカ「私の」

司「お前、一時も携帯を手離すなよ」

ユカ「任された!」

司「チッ、ふざけやがって……ちなみにどのCDを送ったの?」

商店街・路上（夜）

司「閉店セールやってまーす。今週でうちの居酒屋は潰れますよー」

男I「え、そうなの!？」

司「そうなんスよ。商店街の再開発で今年中にはここら辺全部閉店しちゃうんスよ」

男I「えー、今までずっと使ってたのになぁ」

感慨深げに立ち去っていく男I。

司「（気を入れ直し）さ！ 今行っておけば後で思い出に浸れますよー！」

宗介「他の人に自慢できますよー」

勇太「僕らに打ち上げ代をくださいーい」

女D「（司に）三人入れますか？」

司「すぐ入れますよ。入れなかったら今いるお客を追い出しても入れて見せますよ」

女二人の他に泉がいることに気付く司。

泉に見られていないと思った司は、三人に背を向けて場所を案内する。

司の居酒屋・エレベーター（夜）

司が階を操作するパネルにくつつくようにして立って下を向いている。

女Dの声「私、ザ・居酒屋って感じの居酒屋に来るのって超久しぶりかも」

女Eの声「私も。たまにはいいかもね」

エレベーターが居酒屋につき、司は顔を下にしながらたままドアを押える。

司「どっぞ」

店員の声「いらっしやいませー」

女二人の後に泉がエレベーターを降りる。

泉は降り際に小声で、

泉「ほんじなす(馬鹿)」

司が俯いたままドアを閉める。

同・表(夜)

店から出てきた司にミヤが近づき、

ミヤ「さつき司君を探してる奴がいたよ」

司「え？　どんな奴？」

ミヤ「二十代前半くらいの男。ここの辺でツカサってキヤッチ知らないツスカ、って聞かれたから知らない、って答えといたけど」

司「二十代？……お巡り？」

ミヤ「いや、なんか馬鹿っぽいバイトみたいだったけど」
司「サンキュー。誰だか知らねえけど、ろくなことじやないだらうな」

ミヤ「もう潰れるから逃げきれそうじゃない？あ、それとは別に高安さんが探してたよ」

司「え？」

大通り（深夜）

ホームレスがごみ収集所にある収集前の空き缶を潰しながら回収していく。

商店街・路地裏（深夜）

高安に殴られた司が壁に叩きつけられる。

高安「耳に入っちゃったらさあ、相手がツカっちゃんだらうと筋を通さないといけなくなんじゃん？」

司が更に腹を殴られ、地面に倒れこむ。

遠くでアルミ缶をベコツと潰す音がする。

司の居酒屋・表（夜）

閉店とこれまでの感謝を伝える張り紙が張って

ある。

勇太の声「おつです、皆さんおつです!」

居酒屋店内の騒音。

同・内(夜)

居酒屋の客引きの他、高安や希子も混ざって閉店のお別れ会が開かれている。

勇太「(離れた席から) 司さん! 司さん!」

司「何だよ!」

勇太「司さん! 司さん!」

司「だから何だよ!」

勇太「司さん! 司さん!」

x x x

ミヤ「次、決まったの?」

司「一個受かってたけど昨日辞退した」

ミヤ「何で?」

司「やっぱこのまま小さくまとまるわけにはいかねえからな」

ミヤ「おー、恰好いいねえ」

司「(店長に聞こえよがしに) 今日と明日がひっくり

返っても気づかぬえような人生なんてうんざりだからな！」

店長がチラッと司を見遣る。

司とミヤが笑いながら酒を飲む。

x x x

夜が更け、人数が半減、または寝ている。

宗介「俺はまた次の街に流れていくだけだよ」

司「よくこんな仕事を続けてられんな」

宗介「俺らの口一つで決まんだぜ？ 客はメニューや内装なんかで店を決めねえんだよ。俺らを買ってんだよ。俺らが客を引いてこいつらを食わしてやってんだよ」

寝ている連中を指さす宗介。

司「おー……」

希子「じゃあ私もこれで。今までありがとうございまして！」

香山「おいおい、夜はまだまだこれからだよ」

希子「明日から新しいバイト先なんで」

希子が宗介に手を挙げて帰っていく。

宗介も軽く手を挙げる。

希子を引き留めようと香山達が後を追う。

希子の声「また鶯で!」

司「……お前、希子と仲良かったっけ？」

宗介「仲良いつつーか、付き合ってるからな」

司「え!? いつから!」

宗介「俺がここを追い出されるより前だよ」

司「マジで? 知らなかったわ……」

宗介「内緒にしたたからな。でも最後だし、お前になら
言ってもいいかなと思って」

司「……」

宗介「お前も何か秘密はねえの?」

司「ねえよ」

宗介「お前、秘密の一つや二つ持ってねえ人間なんて何
の魅力もねえぞ」

司「……同居人にデリヘルをやらせてることくらいか
な」

宗介「秘密でも何でもねえぞ。皆知ってるよ、それ。高
安さんにやられたる」

司 「え、皆知ってんの?」

宗介 「高安さんなんて知ってて警告してくれてたのにお前が無視するから」

司 「マジか……」

宗介 「その子、俺にも紹介しろよ」

司 「知り合いはちよつとな。特にお前は」

宗介 「何? その子のこと好きなの?」

司 「違う違う、そういうわけじゃねえけど」

宗介 「写真は?」

司 「撮ってねえなあ……あ、昔俺の携帯のロックを外そうとして撮れたのがあるかも」

司が携帯の写真を宗介に見せる。

宗介 「おー、可愛いじゃん。俺がこの子とやったら怒る?」

司 「殺す」

宗介 「嫉妬してんじゃない。好きなんじゃん」

司 「おい、他の写真も見てんじゃないやねえよ!」

笑っている宗介から携帯を取り上げる。

商店街・路上(夕)

客引きが消えて静かになった商店街。
防災無線の定時チャイムで『夕焼け小焼け』が
流れてくる。

居酒屋の看板も電気が消えている。

日焼けサロン・店内（夕）

司が横になり、マシンから紫外線を浴びて肌
を焼いている。

路上（夜）

ユカが車から降りると、近くで携帯をいじって
いる司のもとに走っていく。

ユカ「お待たせ！ やっぱ用心棒がいると偉くなった感
じがしていいね」

司「電話は？」

ユカ「来てないよ。来たらすぐ言うから」

司「電話番号を書き間違えてねえだろうな」

ユカが自転車を押す司の頬にキスする。

司「お前、男のを抜いたばっかだろ！」

ユカ「大丈夫大丈夫。仕事が見つかるまでは私が養って

あげるから」

ユカが司の自転車に乗る。

司 「ねえ、日サロ行っただけど分かる？」

ユカ 「はあ？ 失業保険がないとか喚いてたのに肌を焼くとかあり得んの？」

司 「黒い方が自信が出るんだよ」

ユカ 「……ちよつと暗くて分かんない」

司 「何だよ、それ」

司が自転車に乗ったユカの背中を押して、坂道を登っていく。

ユカ 「よし、もつと押せー！」

マンション・居間

ユカがテレビを見ている横で、司が片眼を瞑りながら携帯で職を探している。

パチンコ屋・内（夜）

蛍の光が流れ、まばらな客も帰り始める。

店内に入ってきたユカがパチンコを打っている司を見つげ、横に座る。

司 「丁度いい時に来たな、もうちょい貸して。ニラウ
ンド確変引いたから。もうちょいで今日すった分を
取り戻せつから」

ユカ 「もう閉店だよ？」

司 「いいから、早くしろよ!!」

ユカ 「そんなに怒んなくても」

ユカが千円札を筐体に投入する。

蛍の光が終わり、店内が筐体の電子音とパチン

コ玉を流し込む音だけになる。

司 「……俺だつて戻れるなら、まじめに勉強して、ち
やんとした会社に正社員として入社して、結婚して
子供を作つて、住宅ローンの金利のことで悩みてえ
よ」

ユカ 「私には選択肢なんかなかったよ」

司 「……」

店員がやってきて

店員 「すみません、そろそろ閉店ですので」

無視する司。

店員 「お客様、申し訳ないんですが……」

なおも無視する司。

ユカ「……司君」

店員「お客様……」

司は台を叩こうと拳を振り上げた所で、叩くのをやめて立ち上がる。

駅・前（夜）

クリスマスのイルミネーションが飾られ、仲の良いカップルが散見される。

歩きながらくしゃみをするユカ。

横にいたはずの司がおらず、後ろを振り向くと司が足を止めている。

司「俺は歩いて帰るからお前は電車で帰れ」

ユカ「え、寒いよ？ 電車賃くらい出すよ？」

司「いらねえよ」

反対方向を向いて歩きだす司。

ユカ「ちよつと待つてよ!!」

大通りに面した歩道（夜）

車ばかりで人が通らない。

ユカがそつと司の手を取る。

ユカ「今日クリスマススイブなの、知ってた？」

司「知ってた」

司が手を解こうとするがユカが離さない。

ユカ「家に着くまでに手を離したら、悪いことが起きるから」

司「これ以上？」

ユカ「これ以上。来る予定だったオーディションの合格通知が来なくなるとか」

司「もう来ねえよ」

ユカ「きつと年末年始で審査がやってないんじゃない？」

二人の前から男が歩いてくる。

ユカ「離さないで」

男は司達が手を離すだろうと高を括って道の真ん中を通ってくる。

徐々に距離が近づいてくる。

体で繋いだ手を断ち切ろうとする男に対し、司とユカは繋いだ手で男の腹を殴る。

手を繋いだまま男を通り越した司とユカが、その場に崩れた男の様子を窺つ。

男「……痛つてえな、こらあー！」

男の追いかける素振りを見て、走って逃げだす
司とユカ。

x x x

息を切らせた司とユカが立ち止まる。

ユカ「……手を離しちゃったね」

司「大丈夫だよ。来年はきつといいことがあんだろ」

ユカ「……」

マンション・表

晴れ着を着た女性たちが通る。

同・居間

無表情で正月番組を見ている司とユカ。

同・居間（日替わり）

司がテレビを見ている。

ユカが出かける準備をしながら、

ユカ「……今日は来てくれないの？」

司「……最近でんぐり返しをしてないね」

ユカ「来てくれないの？」

司 「寒い」

ユカ「その分、多く払ってんじゃん」

大きな溜息をつく司。

デパート・授乳室（夜）

ユカが、おむつを替えるベッドの上に寝ている

男の股間に顔を埋めている。

男がユカのスカートに手を入れ、パンツを脱が

そうとする。

ユカ「ちよつと、駄目だつつってんじゃん！」

手を止めない男。

ユカ「ちよつと、やめろー！」

司が授乳室に入ってくると、男をベッドから床に転がり落とす。

司 「てめえ、何調子こいてんだ、オラー！」

同・階段（夜）

司とユカが誰もいない階段に座って、男から奪った金を数えている。

司 「こつちの方が楽に儲かるな」

ユカ「やだよ、こんな暴力的なの」

司「向こうが約束を守らねえからだろ！」

司の大声が内階段に響く。

ユカが司を残し、無言で立ち去る。

司の居酒屋・内

机や椅子が取り払われて広くなった店内。

司「でも冷蔵庫とか残ってただね」

店長「古いから売れなくてさ。NPOに頼んで東南アジアに送ってもらっただよ。何？何か欲しい物でもあった？」

司「いや、そうじゃなくて……」

店長「そっぴやこないだお前の連絡先を聞いてきた人がいたから教えといたぞ」

司「誰？」

店長「よく分かんねえけど、前に酔っぱらった時に介抱されて礼を言いたいとか何とか」

司「んなこと俺がするか。何、勝手に個人情報教えてんだよ。多分、そいつ探偵だよ」

店長「何だ、その口の利き方は。探られるような生き方

をしてるてめえが悪いんじゃないのか」

司 「これだから秘密のない男は」

首を振って店を出ていく司。

司の夢

咳込み、手で口を押える司。

手を見ると、たくさんのボロボロと抜けた歯が
乗っている。

アパート・一室

司とユカが不動産屋と内見している。

現在の住まいより二、三ランクほど落ちて手狭
になっている。

司がノックした壁が薄くて音が響く。

司 「……」

ユカ「ここにベッドを置いたらぎゅぎゅうになっちゃ
うね。でも狭くても全部に手が届いていい感じじゃ
ん？」

司が窓を開けると、目の前には隣のアパートの
壁が迫っている。

司 「……そうだな」

不動産屋・外観

同・内（夕）

不動産屋 「保証人はどうされますか？ お金はかかりませんが、保証会社もありますけど」

司 「保証会社でお願いします」

不動産屋 「かしこまりました。後、失礼ですがご職業は？」
司 「今は求職中です。彼女が日雇いのバイトをして稼ぎは十分です」

不動産屋 「そうですか……ただ若いカップルの場合、失礼ですが別れることが多くてですね。そうすると支払いが滞ったり……」

司 「大丈夫です。彼女は婚約者なんです。仕事が決まったら結婚するつもりなんで」

ユカが驚く。

不動産屋 「もしよろしければ彼女さんが契約者になった方が良いかと」

司がユカの顔を見ると、ユカが頷く。

司 「じゃあそれで」

不動産屋「（ユカに）すみません、ちなみに成人されますよね？ 身分証明証をコピーさせていただきたいんですが」

顔を見合わせる司とユカ。

同・表（夕）

司とユカが不動産屋から出てくる。

細かく砕けたプラタナスの落ち葉が、風に吹かれて一筋の川のように流れていく。

司 「クソ寒い中、内見までしたのに無駄だったじゃね

えか。クソツ」

ユカ「でも嬉しかったよ？ 婚約の話なんか聞いてなかったから」

司 「馬鹿、ああ言った方が審査が通りやすいんだよ」

ユカ「そうなんだ……それでも嬉しかったな」

司 「……俺が就職して引越すまで、家は割れねえかな？」

ユカ「どうだろ……」

司 「……すっかり冷えたな。ココアでも飲んで帰る

か？」

ユカ「それな！」

歩いてきた司がふと立ち止まる。

司「……前もこの会話したっけ？」

ユカ「してないと思う。また始まった？」

司「いや……」

ゆっくり歩き出す。

マンション・居間

司がソファーに横になって公共料金の請求書を眺めている。

部屋の隅にあるギターケースに目を遣る。

x x x

ユカがいるところに司が帰宅する。

ユカ「……ギターは？」

部屋の隅にあったギターがない。

司「売ってきた」

ユカ「何で!？」

司「金がねえからに決まってるだろ」

ユカ「お金を渡すから買い戻してきてよ！」

司「何だ、お前。彼女面して。俺が売れたら、私が体を売って支えてました、って自慢してえのか」

ユカ「ウリはやってねえし、そんな簡単に諦められんのか」
「!？」

司「元々諦めてたんだよ。苦しんで諦めてたんだよ。そしたらお前が能天気になんて希望を持たせるようなことをしやがって。そりゃ就活にも身が入んねえよ」

ユカ「私が悪いの!？」

司「今の状況に追い込んだのはお前だろ。どうすんだよ、家賃が払えずに俺まで家を追われんのか。どうするんだよ、なあ!」

ユカ「……ウリをやってもっと稼げって?」

司「……別にそんなことは言ってるねえよ」

ユカ「私がウリをしても司君は平気なの?」

司「……」

ユカ「司君がやれってんならやるよ。ねえ、何か言って

よ。なあ、言えよ！」

司「……………」

ユカ「卑怯だね。逃げるなんて」

司「……………」

ユカ「どうでもいつか。こんな私、誰も好きじゃないも

んね」

司「……………」

x x x

ユカが携帯で出会い系に書き込んでいる。

ユカ「わかる人は連絡ください……………わかる人って何だろ

うね」

司「わかる人にはわかるらしいよ……………俺の仕事が決ま

ったらこういう仕事は辞めて、普通のバイトをすり

やいいよ。未成年で身分証明がなくて何ができるか

知らねえけど」

ユカ「……………私はどこに行けばいいの？」

司「……………ここにいればいいよ」

ユカ「でも、どうせまたこういう仕事に戻ってくるんだ

ろつな」

司の肩に頭を乗せるユカ。

ガレージ型ラブホテル・表（夜）

煌々と光るネオンの看板。

道路脇に座って月を眺めている司。

同・一室（夜）

女子高生の制服を着たユカが男とセックスをしている。

男がユカの首を絞めながら腰を動かす。

ユカの顔が鬱血して赤くなっていく。

ユカが男の手をタップするが、男は首から手を離さない。

同・表（夜）

ガレージが開き、車が出ていく。

司が素早くガレージから室内に侵入する。

同・一室（夜）

司が入ってきてきて上着を脱ぐ。

ユカが見えず、シャワーの音が聞こえる。

同・浴室（夜）

ユカが女子高生の制服を着たままシャワーを浴びている。

司 「（入室し）何かもう色々限界だな」

ユカが声を殺し泣いていることに気づく。

ユカ 「……何か悲しい話をして」

司 「……前に大嫌いな親父が癌と不倫に追い詰められて自殺したって言ったじゃん」

シャワーを浴びながら聞いているユカ。

司 「綺麗ごとばかりかぬかす奴でさ……親父に不倫を教えたのが俺なんだよね……闘病中に親父の奴、俺が倒れて家族の絆が深まったあの、早く良くなるために何とか健康法をやってるだの、前向きなことをぬかしてたからさ。俺が心を折ってやったんだよ」

ユカ 「……お父さんの反応は？」

司 「顔を背けて窓の方を向いてたから、多分泣いてたんじゃないかな。確かカーテンで外も見えなかったし……結局、俺が……」

涙を隠すように、服を着たまま後ろからシャワ

ー中のユカを抱きしめる。

ユカ「悲しい話をさせてごめんね」

司「ヨーグルトを買って来ような。お前の分と俺の分と」

ユカ「甘い奴」

司「ああ、甘い奴な」

同・外観（夜）

制服と司の濡れた服が外に干してある。

司の居酒屋・表

中から店長が出てくると、表に司がいる。

店長「うおっ。何やってんだ、こんな所で」

司「いやー……また店長の下で働きたいなー、思っ
て」

店長「はあ？ あんな偉そうに言っといて？」

司「悪かったよ、それについては。俺も若かったし…
…」

店長「お前さあ、前から思ってたけど何でタメ口なんだ
よ」

司 「えええ、今更？……（頭を下げ）もう一度働かせ
てください」

店長 「……今度の街はもっと取り分は少なえぞ？ 十三
パーとか」

司 「それもしょうがない」

店長 「どうした？ えらく謙虚じゃねえか」

司 「今の俺にはこれくらいがお似合いだったことだよ
解体のためにビルに足場が組まれていく。

人通りのない商店街を眺める司。

店長 「感慨深いか？」

司 「うーん……これが俺の道なんだろうね」

司のマンション・玄関（夜）

帰宅した司がユカと携帯で話している。

司 「今帰ったばっか。お前、今日は来なくていいっつ
ってたじゃん……まあいいや、よく分かんねえけど、
じゃあ今から行くよ」

同・表（夜）

司が自転車で走り出す。

近くに駐車中のレンタカーも、司の後を追うようにゆっくり発車する。

ラブホテル・表

司が寒そうに待っている所へ、ユカがホテルから出てくる。

司 「何？ 用事って」

ホテルから宗介が出てくる。

宗介 「よお、久しぶり」

ユカ 「このお客さんが司君を知ってて、呼べってうるさかったの」

司 「……」

宗介 「店長からお前が金に困ってるって聞いたからさ。

俺がお前の彼女経由で金を落としてやるうと思ってさ」

司 「……嘘つけ。キッコの仕返しだろ」

宗介 「キッコ？」

司 「お前の彼女と俺が寝たから、その仕返しだろ」

宗介 「……ああ、言ったかも……嘘だよ、それ。誰があんなピッチと付き合つかよ」

司 「はあ？ じゃあ何目的だよ。こいつを探すのだったそんな簡単じゃねえだろ」

宗介 「お前の好きな女とやりてえと思って。お前、嫌がってたしよ。聞いたらお前、一回もこの子とやってないらしいじゃん。なかなか良かったからまた買ってもいいぜ？」

手が震えている司を見て困惑するユカ。

宗介 「嫌なら最初から売るんじゃねえよ」

司 「てめえ……」

宗介 「（笑う）嘘嘘。お前のその顔が見れば一回で十分だよ。これで昔店長にチクったことも許してやる

「よ

司 「……待てよ、お前。これ、二回目だろ」

宗介 「は？ 初めてだよ。呆けたか？」

司が宗介を殴る。

ユカ 「ちよつと！ 本当に初めてだつて！」

司 「嘘つけ！ 前もこの光景、見たことあんど！」

司が続けて殴ろうとするが、宗介にカウンターで殴り返される。

宗介 「てめえ、調子に乗ってんじゃねえぞ、こらあ……」

ユカ「やめて！」

ユカが止めに入るが、投げ飛ばされる。

物陰から急に五十嵐が出てきて、ユカを捕まえる。

ユカ「きゃあ！」

司「誰だ、あいつ！」

構わずに倒れた司を蹴る宗介。

司「ッ！ ちょっと待……！」

宗介「お前のその口先だけなのが昔から嫌いだったんだよー！」

倒れている司から、五十嵐に引っ張られていく

ユカの足元が見える。

司「ユ……！」

ユカ「助けて！ アブラモビッチ！」

x x x

司が顔に缶ビールを押し当てて、殴られた跡を

冷やしている。

心配そうに見ているユカ。

傍らに油谷が立っている。

司「……今日来なくていいつつってたのは、仕事の後

にビッチと約束してたからか。つかビッチの連絡先は消えたんじゃないのかよ」

ユカ「……連絡先を書いた紙が残ってたの」

油谷「ユカちゃん、売春させるようなクズの所にいることねえって。家に来なつて」

ユカ「ちよつと黙つてて」

司「ああ、行けばいいよ。あのおっさんに家も知られたし、あのおっさんからお前を守ったのはビッチだつたわけだし？ お前が来てからろくなことがねえし」

ユカ「はあ!? 本気で言ってるの!？」

油谷「じゃあ今から荷物をまとめて、うちにおいでよ」

ユカ「黙つてて!」

油谷「……」

ユカ「……いいの？ それで司君はいいの？」

司「……いいよ」

油谷「ユカちゃん、ここにいた方がいいって。家にまた

あのおっさんが張ってるかもしれないし」

ユカ「……アブラモビッチに荷物を持ってきて貰っていい

い？ 家の中に入って」

司 「俺は？」

同・一室（夜）

ユカ「さっきの人から聞いたよ！ デジャヴのせいでセ
ックスできないって。何で早く言ってくんなかった
の！」

司 「……何か、それって不安が原因かもしれねえんだ
って。それってダセえし……言ったら認めることに
なんだろ？」

ユカ「ねえ、来て。そんな不安、私のアソコで溶かして
やる」

x x x

ベッドで横たわっている司とユカ。

司 「もつと早く言つとけば良かったな」

ユカ「もしかしたらこれだけの回り道が必要だったのか
もよ？」

司 「……そう考えるとデジャヴってあれだな。通らな
きゃいけないかった道を教えてくれてんのかな」

ユカ「運命みたいな？」

司 「そんな感じかなあ……まさかこんな関係になるとは出会ったときは思わなかったよなあ。最初は喫煙所で……」

ユカの携帯に油谷から着信が入る。

ユカ 「もしもし……あ、そう。良かった。全部言った奴を持ってきてくれた？……司君ともう少し話があるから、私がいいっていうまでそこで待ってて（通話を終える）」

電話の間に司が服を着て、二万円を机の上に置く。

ユカ 「ごめん、さっき何か言ってなかった？」

司 「……良かったな、いい人が見つかった」

ユカ 「どうかな。本当に私のことを好きなのか、使命感か正義感？ みたいなのか」

司 「それは、あれだろ。ユカが幸せに慣れてないだけだろ」

ユカ 「（金に気付き）……何、そのお金」

司 「通常料金」

ユカ 「いらないうって。これまでの時間を否定することをしないで」

司 「何が」

ユカ 「私のことを好きでも何でもなくてただ買ったみたいじゃん」

司 「俺がいつお前を好きだつて言ったよ？」

ユカ 「……」

司 「おいおいおい、冗談だろ？ 俺は好きな女を取られるような間抜けじゃねえよ」

ユカ 「あんなに一緒にいたのに？ あんなに笑ってたのに？ あれで好きじゃないんなら私、これから先、人から好かれることなんか一生ないよ」

司 「俺は親父とは違えんだよ。じゃあな」

司が逃げるように部屋を出る。

ユカ 「金を持ってけよ！ ふざけんな！」

同・表（夜）

油谷が携帯をいじりながら待っている。

司が通りすがりに、

司 「よく待ってられんな、犬みてえに」

油谷 「いいじゃん、別に犬でも。何か問題あるか？」

司 「……前にどつかで会わなかったっけ？」

油谷「？ ねえよ」

司「じゃあ会うことは決まってるんだな」

油谷「何だ、そりゃ？ 気持ち悪いなあ」

司「俺も犬だったってことだよ」

通り過ぎる司を油谷が呼び止める。

油谷「なあ、ユカちゃんから持ってくるように頼まれて

たんだけど、これで合ってる？」

ガチャガチャで取った不細工なキャラクターを

司に見せる油谷。

同・浴室（夜）

浴槽に浸かっているユカが、泣きながら、剃刀を左手の手首に当てる。

部屋のドアの開く音がして動きを止める。

透明なガラス張りの浴室のドアを通して部屋の様子を窺うユカ。

司の腕が視界に入ると、机の上の二万円がパツと取られ、代わりに不細工なキャラクターが机の上に置かれる。

やがて部屋のドアの閉まる音がする。

ユカ「……………」

ユカが剃刀を浴槽にポチャンと落とす。

了

2016-09-30